



TITLE:

[書評] Mario D' Amato, Jay L. Garfield & Tom J. F. Tillemans (Eds.), Pointing at the Moon: Buddhism, Logic, Analytic Philosophy

AUTHOR(S):

白川, 晋太郎

CITATION:

白川, 晋太郎. [書評] Mario D' Amato, Jay L. Garfield & Tom J. F. Tillemans (Eds.), Pointing at the Moon: Buddhism, Logic, Analytic Philosophy. 京都大学文学部哲学研究室紀要 2011, 14: 96-100

ISSUE DATE:

2011

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/173146>

RIGHT:

書評

Mario D'Amato, Jay L. Garfield, & Tom J. F. Tillemans (Eds.),
*Pointing at the Moon:
Buddhism, Logic, Analytic Philosophy.*
Oxford University Press, 2009.

白川晋太郎

1. 分析アジア哲学 Analytic Asian Philosophy とは？

副題からもわかるように、本書は、仏教と現代論理学と分析哲学がコラボレーションしたらどのようなものがうまれるかを示すものである。2005 年 11 月、仏教や論理学や分析哲学をそれぞれ専門にしながらも、こうした分野が混ざりあう領域に興味を持つひとびとがケンブリッジ大学に集まって「論理学と分析哲学における仏教 Buddhism in Logic and Analytic Philosophy」が開催された。本書におさめられた論文の多くはそこで発表されたものがオリジナルとなっている。多くのひとにとっては、仏教哲学や禅思想などアジアの哲学と分析哲学のとりあわせは奇妙であり、むしろ「人生の意味とは何か」など「大きな問題」や現象学に関心があるという共通点から、アジアの哲学は「大陸系」哲学と相性がよいと思われるかもしれない。しかしながら本書によれば、西洋哲学とアジアの哲学との実りある対話は、仏教と論理学と分析哲学とのあいだにおいても多くなされている。このような取り組みは多くの分野にひろがっていて、論理学、言語哲学、形而上学、認識論、倫理学の分野に及んでいる。本書はこうした状況の一端を紹介するものとなっている。

2. 本書の内容

本書におさめられた論文は大きく三つのテーマにわけることができる。

(1) 語りえないこと、言語の限界に関するもの。所収の 10 本の論文のうち 5 本は、語りえないことに関して生ずる問題やパラドックスを扱っている。仏教においては、日常的に経験される世界を記述する言語を用いていかにして涅槃など人間の認識から独立した究極的な世界を記述することができるのかということが伝統的に問題になってきた。西洋哲学においてもこのトピックはギリシア以来長い伝統を持つが、とりわけ近代以降では認識や表現の限界を記述しようとするカントのプロジェクトによって注目されるようになり、ウィ

トゲンシュタインの『論理哲学論考 *Tractatus Logico-Philosophicus*』によって絶頂を迎えた。本書では、禅とウィトゲンシュタインを比較するもの(Read)、「ブッタはいかなる立場にも立たないという立場に立っていた」というナーガールジュナ Nāgārjuna の矛盾的表現について考察するもの(Westerhoff)などがある。

(2) 世俗諦 *saṃvṛti-satya* (言語表現や言語習慣による日常的真理) と、勝義諦 *paramārtha-satya* (言語表現や言語習慣を超越した究極的真理) を区別する「二諦説」に関するものであり、次節で詳しく取り上げる。

(3) 心の哲学に関するもの。仏教には「無我 *anātman*」という教義があり、魂や自己といったものは存在しないとされる。この考えからは、主体性や道徳的責任などをどのように理解すればよいのか、また、われわれが個人としての意識があることや人々の社会的関係をどのように説明すればよいのかという問題が生じる。こうしたテーマについて Martin は論じている。

3. ひとつの論争——ナーガールジュナは矛盾を認めているのか

世俗諦と勝義諦を区別する二諦説に関して興味深い論争がある。この論争では現代論理学のテクニックを用いた仏典解釈がなされ、仏典を題材にしながらも分析哲学的な議論が展開されているという点で本書の性格をよくあらわしている。「分析アジア哲学」なるものの雰囲気を感じてもらうために、この論争を少し詳しく紹介しよう。

論争の片方には中観派 *Mādhyamika* の始祖ナーガールジュナの哲学を徹底的な真矛盾主義 *dialetheism* と矛盾許容論理 *paraconsistent logic* として解釈する Priest と Garfield がいて、その解釈に反対するのが本書における Tillemans である。

3.1 ナーガールジュナの存在論的パラドクス

Priest と Garfield は '*Nāgārjuna and the limits of thought*' (Priest & Garfield, 2002)において、ナーガールジュナの哲学を徹底的な真矛盾主義と矛盾許容論理を認めるものとして解釈している。すなわち、ある主張 ϕ に関して、 $\phi \wedge \neg \phi$ という矛盾しているが真であるような主張が存在することを認め、かつ、矛盾からはあらゆる主張が導かれるという「爆発 *explosion*」を認めていないものとして解釈する。ナーガールジュナが真なる矛盾を認めていることの根拠として挙げられるのが、彼らが「ナーガールジュナのパラドクス」と呼ぶ存在論的パラドクスである。

ナーガールジュナの根本思想は、「すべてのものは空である」というものであり、これは、すべてのものは本質となるような固有の性質（自性）を持たないということを意味する。

その主著『中論 *Mūlamadhyamakakārikā*』⁽¹⁾ではこのことが徹底的に論じられているが、典型は5章にみられる。ここでは対象の空間的位置がその対象なしに存在していると考えすることはできないし、反対に、空間的位置がない対象を考えることもできないという理由から、対象の空間的特質は本質的ではありえず、それゆえ、空間的位置と対象は相互依存 *co-dependent* しているといわれる。同じ論法がすべての特質に適用され、「特質づけられるものは存在しない。特質もまた存在しない」(5, 5) といわれる。かくしてナーガールジュナはすべてのものは空であると、つまり他のものに依存し、縁起 *dependently co-arisen* していると主張する。ところでここでいわれる「すべてのもの」という表現は厳密に受け取らなければならない。「すべてのものは空である」といわれるとき、「すべてのもの」のなかには「空」そのものも含まれている。「空」そのものも空であることが『中論』における中心的な主張のひとつであった。

このことから以下のようなパラドクスが導かれる。「すべてのものは空である」といわれるとき、すべてのものは空という性質も含めいかなる固有の性質も持たないことを意味している。ところが空という性質を含めいかなる固有の性質も持たないことが空ということであったから、すべてのものは空という固有の性質を持つことになる。それゆえ、「すべてのものは空という性質を欠くと同時に有している」。これがナーガールジュナの存在論的なパラドクスである。西洋哲学はこのパラドクスから新たな教訓を得て、20 世紀には言語論的転回 *linguistic turn* が起こったように、今世紀には存在論的転回 *ontological turn* が起こり、(矛盾した) 実在の性質が問われるようになると Priest は語る(Priest, 2002, p.295)。

3.2 Tillemans の反論

ナーガールジュナの哲学を真矛盾主義と矛盾許容論理として解釈する Priest と Garfield に異議を唱えるのが、本書におさめられた Tillemans の論文 ‘How Do Mādhyamikas Think?: Notes on Jay Garfield, Graham Priest, and Paraconsistency’である。Tillemans は真矛盾主義を「弱い」と「強い」とに区別する。「弱い」真矛盾主義は、あるところでは主張 ϕ が真であることを認めるが、別のところではそれを否定した $\neg\phi$ が真であることを認めるものである。これにたいして「強い」真矛盾主義は、 ϕ と $\neg\phi$ とが結合したもの、つまり $\phi \wedge \neg\phi$ が真であることを認める。Tillemans は、Priest と Garfield が「強い」真矛盾主義の観点からナーガールジュナを解釈していると考え、この点を批判している。ナーガールジュナには「弱い」真矛盾主義しか認められないというのが Tillemans の主張である。

ナーガールジュナが強い矛盾を認めていない根拠は二つ挙げられている。ひとつはテキスト上の根拠であり、『中論』には強い矛盾がはっきりと否定されている箇所がある。「ニ

ルヴァーナのうちに、どうして有と無との両者がありえようか。この両者は同一のところには存在しえない。それは光明と暗黒とが同一のところに存在しえないようなものである」(25, 14)。また「まず、有であるものが消滅することは起こりえない。何となれば、〔あるものが〕有であってしかも無であることは、ひとつのものにおいては起こりえないからである」(7, 30)。

ふたつめは中観派の方法論に訴えてのものである。インドでは伝統的にひとつのテーマを肯定、否定、肯定かつ否定、肯定でも否定でもない、の四つに場合分けして考察する（これは「四句分別 *catuṣkoṭi*」と呼ばれる）。すなわち命題 ϕ に関して、西洋の伝統的な論理学では ϕ と $\neg\phi$ の二つの可能性しか考えないが、古典的なインドの論理学においては ϕ 、 $\neg\phi$ 、 $\phi \wedge \neg\phi$ 、 $\neg(\phi \vee \neg\phi)$ の四つの可能性を考える。そして四句をすべて否定するのが中観派の方法である。「空と説くべからず。空でないと説くべからず。どちらでもある〔空でありかつ空でない〕とも、どちらでもない〔空でなく空でなくもない〕とも説くべからず」(22, 11)。この引用からわかるように、四句の三つめで強い矛盾 $\phi \wedge \neg\phi$ （空でありかつ空でない）がはっきりと否定されている。それゆえ強い矛盾をナーガールジュナが認めていると考えることはできない。

こうしてナーガールジュナが強い矛盾を認めていると解釈することはできない。だが Tillemans は弱い矛盾については認めている。それはナーガールジュナを含め中観派や般若経 *Prajñāpāramitāsūtra* において、業や苦などが存在すると同時に存在しない（空である）といわれるとき、あるところでは ϕ が主張され、他のところでは $\neg\phi$ が主張されているからである。Tillemans は例を挙げていないが、『中論』においても、一方で「解脱がある」(18, 5)とか「果報がある」(17, 1)といわれ、他方でそれを否定した「解脱はない」(8, 6)とか「果報はない」(17, 33)といわれている。また「もろもろのブッたは『我がある』と説き、『無我である』とも説き、また『我なるものはなく、無我なるものも無い』とも説いた」(18, 6)という箇所もある。

このように一見して矛盾した主張をどのように理解すればよいか。Tillemans は静寂主義 *quietism* の観点から理由を挙げている。あるところで ϕ （解脱は存在する）を主張すれば、 ϕ （解脱は存在する）という考えに対して次第に執着がうまれてくる。執着こそ苦しみの原因であり解脱からほど遠いものであった。そこでその執着を取り除くために、 ϕ （解脱は存在する）という主張は、世俗諦（言語表現や言語習慣による日常的真理）レベルにおいてのみ成り立つものであり、勝義諦（言語表現や言語習慣を超越した究極的真理）レベルではすべては空であるから解脱さえも存在しないと考え、 $\neg\phi$ （解脱は存在しない）と主張する。ところが今度は $\neg\phi$ （解脱は存在しない）という考えに執着がうまれてしまう。

そこでさらに「 ϕ も否定した」「 $\neg\phi$ （解脱が存在しないのではない）すなわち ϕ （解脱は存在する）」が主張されることになる。このように、ひとつの立場や主張へ執着することによる迷いや苦しみを和らげようという静寂主義の実現のために、ナーガールジュナは二諦説の区別のもとに、 ϕ を主張しながら「 $\neg\phi$ も主張する」といった矛盾をあえておかしている」と Tillemans は結論している。

4. 総評（感想）

つぎのような悩みを持っているひとに本書をオススメしたい。はっきりとしてわかりやすい文体に惹かれ、あるいは論理学が好きで、あるいは他の理由によって分析哲学に入ったが、最近の分析哲学の議論はテクニカルすぎてついていけない。専門的で緻密な議論は「純粋で知的」な感じがするけれど、みずからの世界観や人生観にあまり影響を与えないように思える。かといって世界観や人生観を求めていわゆる「大陸系」といわれる哲学書を読んでみても、分析哲学との文体の違いにまごつく。かくして分析哲学にも大陸哲学にも違和感を抱く。西洋哲学から離れて東洋哲学に足を踏み入れようにも、その曖昧さや最終的に「悟り」とか「解脱」といったものは実践的に理解するしかないといわれることに少し気がひける。こんなふうに進むべき道に悩んでいるひとにとって、本書はいい道しるべになるかもしれない。本書に登場する分析哲学者、論理学者、仏教学者は、お寺でたずねたら「そんなことより黙って修行せい！」と怒られそうな「大きな問題」について、じつに素朴な態度でわからないところははっきりわからないと言いながら考察していく。曖昧な部分を残さない論述によって、分析哲学の議論を追うかのように仏教の議論を追うことができる。人生の意味など「大きな問題」を分析的文体で語る哲学を求めているひとにとって、本書はしっくりくるものだと思う。

註

(1) 以下、『中論』からの引用の際は(章番号, 節番号)を記す。邦訳は基本的に中村(2002)によるが、議論の都合上、一部 Garfield(1995)を参考に変更したところがある。

文献

Garfield, J. L. (1995). *The Fundamental Wisdom of the Middle Way: Nāgārjuna's Mūlamadhyamakakārikā*. New York: Oxford University Press.

中村元 (2002). 『龍樹』, 講談社.

Priest, G. (2002). *Beyond the Limits of Thought*. New York: Oxford University Press.

Priest, G & Garfield, J. L. (2002). 'Nāgārjuna and the limits of thought', in Priest(2002).

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕